



御楼門DATA

二重二層の武家門
(木造2階建て)

高さ 約20m

幅 約20m

奥行き 約7m

支柱(鏡柱)
約90cm×約70cm

鹿児島(鶴丸)城は、慶長6年(1601年)頃のちに島津家第18代当主・初代藩主となる家久が建設に着手した島津氏の居城で、背後の山城(城山)と麓の居館からなる城です。

居館(現：県歴史資料センター黎明館)の正面中央には、鶴丸城のシンボルとして御楼門がありました。明治6年(1873年)の火災で焼失しました。

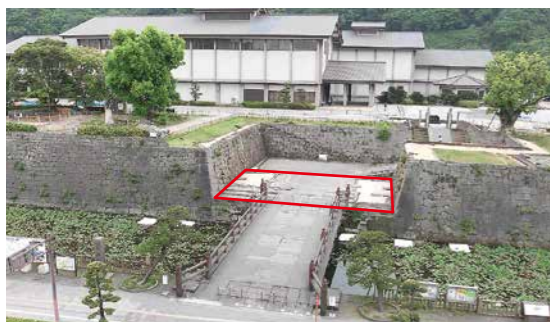
焼失前の明治初期に撮影された古写真の解析や、現存する礎石に残る柱の痕跡などから、その大きさは高さ・幅ともに約20メートルもある国内最大の武家門であったものとされています。

現在、かごしま国体・かごしま大会が開催される2020年3月の完成を目標に、この御楼門の建設が進められています。

◆ 国内最大の武家門「御楼門」



明治初期に撮影された焼失前の御楼門(尚古集成館蔵)

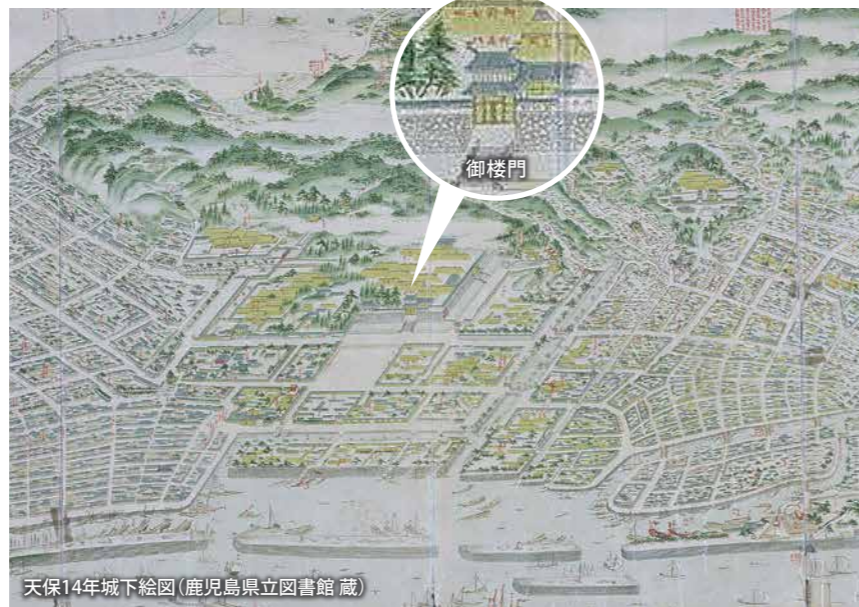


▲御楼門建設地(黎明館正門)



◀現在も残る御楼門の礎石の一つ

大きいもので
約1.2m×1.0mの
礎石もある



天保14年城下絵図(鹿児島県立図書館蔵)



特集

鹿児島新たなシンボルへ

鶴丸城 御楼門の建設

明治6年(1873年)に火災で焼失した鹿児島(鶴丸)城のシンボル「御楼門」。現在その復元を目指し、官民一体で取り組みが進められているのをご存じでしょうか。今回は、2020年3月の完成に向け本格化している建設の動きなどを紹介します。

2020年3月
完成予定

※写真は完成イメージです

② **左官工事** 荒壁の土作り

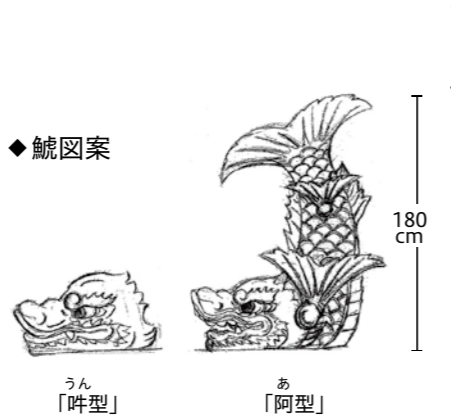
昨年7月から、2階漆喰壁の下地となる壁土づくりを行っています。

日置市産の土にワラスカ（ワラなどを刻んだもの）を練り込み、その後1カ月おきにかき混ぜることで徐々にワラスカが発酵し、土に粘りが生まれます。この作業は今後も8月頃まで続きます。



① **木工事** 木材の製材・乾燥など

主要な柱に使用するケヤキの大径木などの木材を乾燥させ、現在、最終の刻み工程を行っています。



③ **金属工事** 鯨の意匠(デザイン)の検討

『鹿児島県史料名越時敏史料四』に、唐金(青銅製)のものに掛け替えられたとの記録があり、古写真や他の城郭の例をもとに、製作を進めています。



専門家の指導のもと、仕様を検討

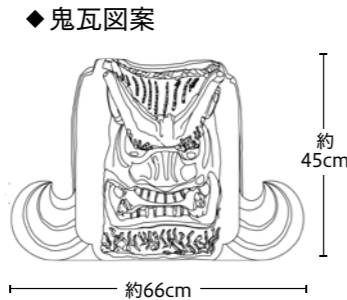
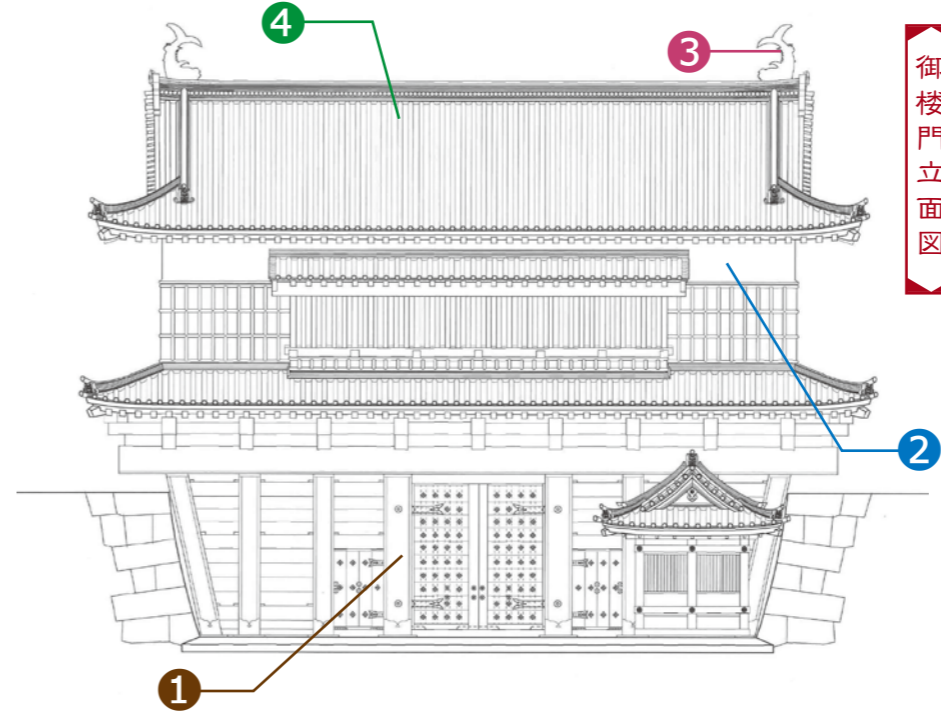
瓦の大きさや紋様、金物の意匠(デザイン)など、建築の過程における課題や詳細な仕様については、発掘調査の成果などを踏まえ、専門家の指導・助言を得ながら検討を行いました。



◆ 進む建設の様子

御楼門を新たな鹿兒島のシンボルへ

御楼門の建設に向けた動きは、平成25年4月に鹿児島経済同友会が復元計画を提言したことからは始まりました。その後、経済団体などがつくる鶴丸城御楼門復元実行委員会が企業や個人に対して寄附金の募集を行った結果、目標額4億5千万円を上回る寄附が集まり、県もこの取り組みを支援することとなりました。御楼門の建設は、民間が主導する新たな官民

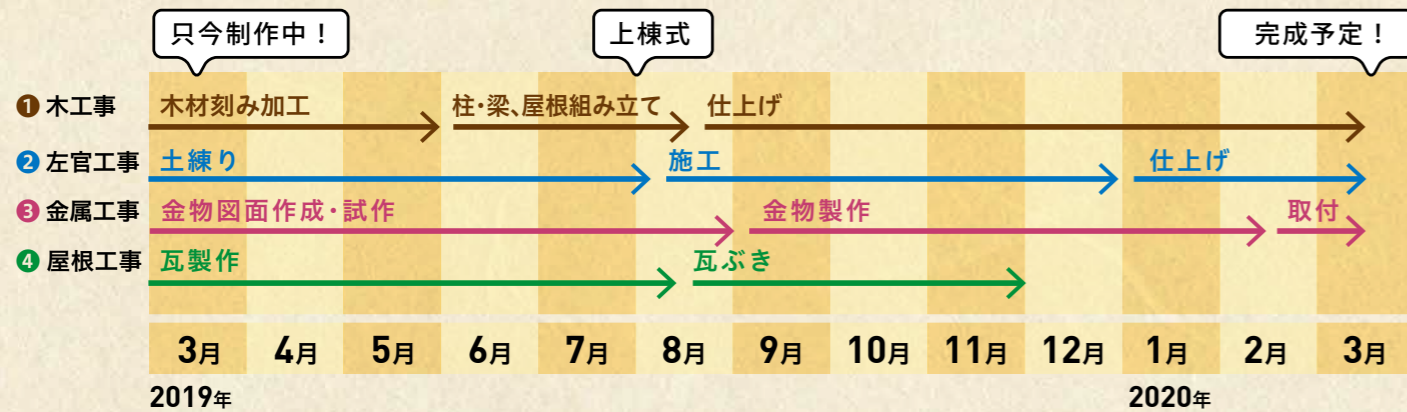


④ **屋根工事** 瓦や鬼瓦の製作

埋蔵文化財の発掘調査などから、御楼門には城郭としては珍しい鬼面の鬼瓦や、非常に大きな平瓦、丸瓦などの瓦が使われていたことが判っています。瓦の大きさや紋様は、御楼門が最後に建てられた江戸時代天保期の特徴を持つ出土品を原形に復元を進めています。

今後のスケジュール

2020年3月の完成を目指して建設中です



工事の様子を見てみよう!

工事期間中、御楼門の建設過程を県民や観光客の皆さまが見ることができます。ぜひご利用ください。



外壁に完成イメージ図を描いたシートを張ってライトアップします。



工事の様子を見学できるよう専用通路を設置します。



連携のモデルの一つであり、鹿児島島の歴史や文化、建築技術の継承のほか、新たな観光拠点づくりとしても意義のあるものです。

また、御楼門が鹿児島島の新しいシンボルとなることで、文化施設などが集中する「かごしま文化ゾーン」のさらなる充実や街中のにぎわい創出など、中心市街地の活性化に繋がることも期待されます。

※詳しくはP.9をご覧ください

御楼門の完成を目指して

寄附金を募集しています

御楼門を史実に忠実に復元するため、新たな財源として
1億8千万円確保する必要があり、寄附のご協力をお願いしています。

瓦などの埋蔵文化財の発掘調査や古写真解析を進め、その最新成果を施工内容に反映させる必要があり、建設総事業費は当初計画の9億1千万円から10億9千万円に増加しました。皆さまの温かいご支援をお待ちしております。



明治初年の御楼門(鹿児島県立図書館蔵)

寄附の方法

鹿児島銀行の本・支店(県外含む)に設置している協力寄附金専用の振込用紙にてお振り込みください。(手数料不要)
振込用紙の郵送も行いますので、どうぞお問い合わせください。

寄附金の額

個人(またはグループ):1000円以上
法人(または団体):10万円以上

詳細はHPをご覧ください



2020年3月まで

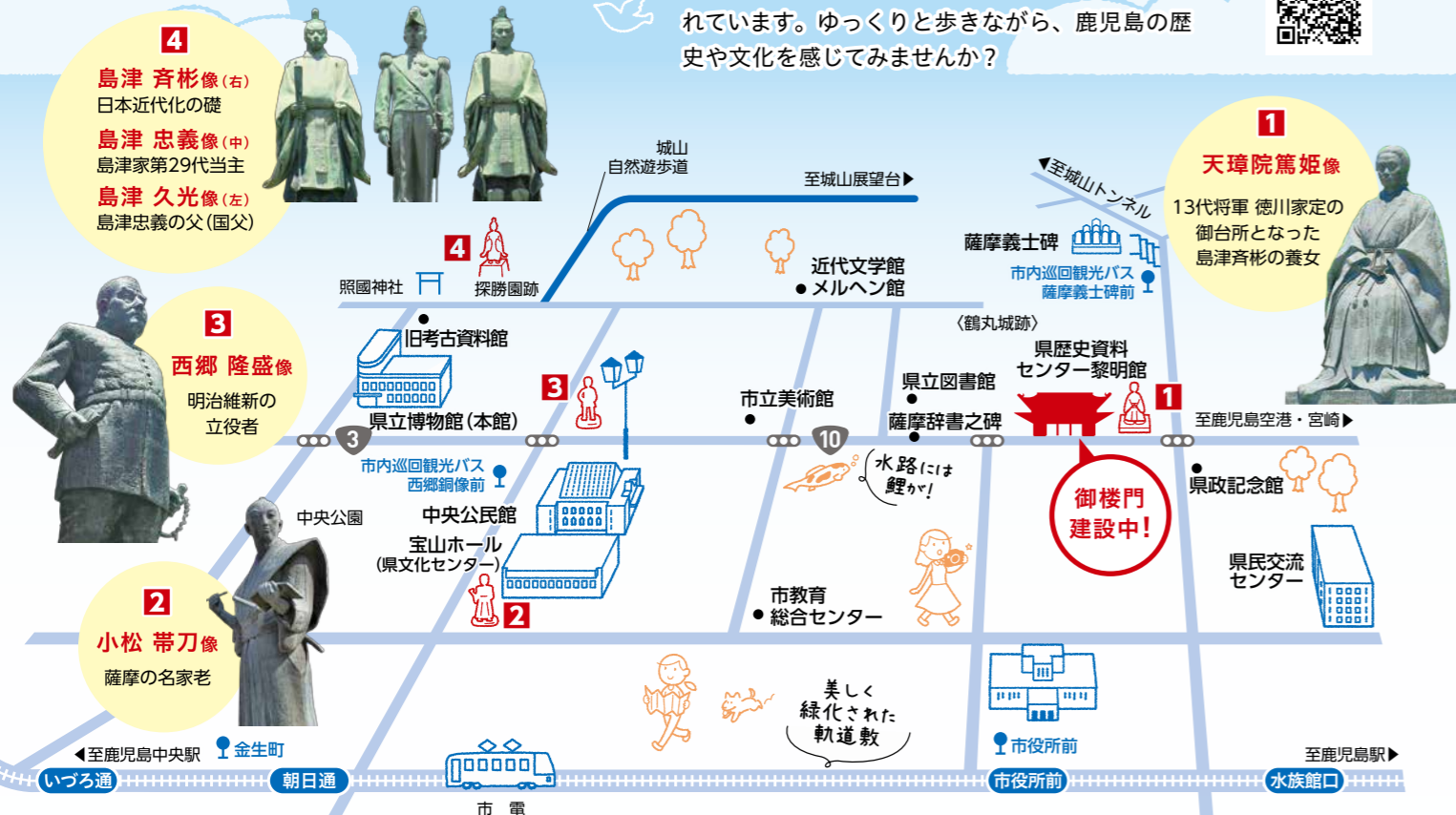
問い合わせ先 鶴丸城御楼門建設協議会事務局(県庁御楼門等建設推進室内):099-286-2506

行ってみよう!

かごしま文化ゾーン

御楼門が建設される「かごしま文化ゾーン」には、約1キロメートル圏内に文化施設をはじめ、明治維新の立役者たちの銅像や記念碑などが多く建てられています。ゆっくりと歩きながら、鹿児島の歴史や文化を感じてみませんか?

各施設の詳細はHPをご覧ください

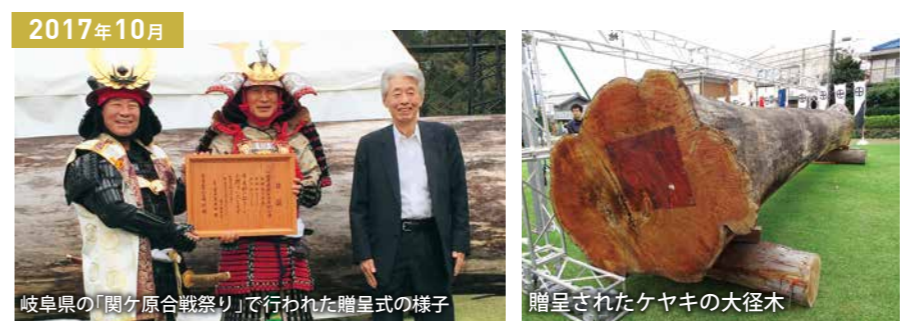


かごしま文化ゾーンへのアクセス

車:鹿児島中央駅から約15分
JR:鹿児島駅から徒歩20分
市内巡回観光バス:西郷銅像前・薩摩義士碑前で下車
市電:市役所前・朝日通電停から徒歩約5分

建設への温かい協力

御楼門の建設には、直径1メートルを超える大径木など多くの木材が必要なため、これまで県内外から調達を進めてきました。そのような中、岐阜県と湧水町から、地元産のケヤキが贈呈されました。



江戸時代の薩摩藩による木曾三川の治水工事「宝暦治水」の偉業を縁に、本県と姉妹県盟約を締結している岐阜県から、樹齢300年以上、幹周り4メートル・長さ8メートルもある立派な大扉用のケヤキが贈呈されました。



島津家久の父、義弘が一時居城とした松尾城があった湧水町。その縁から、樹齢100年以上の15本ものケヤキが贈呈されました。

御楼門復元への思い



かつて御楼門は、城下町として発展してきた薩摩藩のシンボルの一つでした。御楼門が完成すれば、鹿児島島の新たな観光スポットや歴史学習の場となり、まち歩きの一つの起点として、回遊性のあるまちづくりにも役立つと期待しています。

復元にあたり多くの寄附をいただいた皆さまや、ケヤキなどを贈呈していただいた方々の熱い思いに添えられるよう、来年3月の完成を楽しみに、これからも官民一体となって取り組んでいきたいと思えます。



調査研究を進めてきた御楼門の建設工事が本格的に着手され、設計・工事監理者として身の引き締まる思いです。

歴史的建造物として可能な限り150年前の姿を復元できるように、城郭などの専門家のご指導をいただきながら、これまで蓄積した技術の全てを注いでいこうと思えます。工期の監理や工事の安全確保、文化財の保護に努めるとともに、多くの施工関係者と連携しながら、完成を目指して全力を尽くしていきます。